

所 陵

No. 75

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



青花白磁花鳥文大皿（明代後期）

● 目 次 ●

「田家の図」と菅美記子の生涯	米田 文孝	2
『はくぶつかん』にみる昭和50年代前半の東大阪市立郷土博物館（下）	長谷 洋一	6
「奈良県の近代化遺産について—奈良県の取り組みと事例紹介—」	井上 主税	8
春季企画展 河内国府遺跡発掘100周年 —近畿地方先史時代考古学のはじまり—	山口 卓也	10
本山彦一蒐集考古資料の剝片尖頭器	渡邊 貴亮	12

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171（直通） Fax. 06-6388-9928

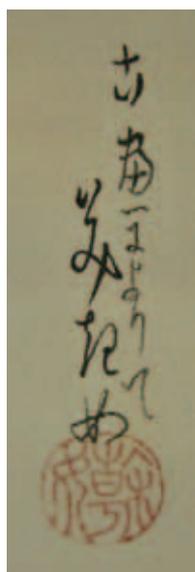
<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

「田家の図」と菅美記子の生涯

米田文孝

1. はじめに

2014年、鳥取県立博物館で開催された没後50年展を契機に再評価されつつある菅楯彦（1878～1963年）は、北野恒富と並び、近代大阪画壇を代表する画家とされる。楯彦は大正6（1917）年、人気絶頂期の名妓である南地（難波新地）宗右衛門町の富田屋八千代と結婚し、世間を驚かせた。漸く世間に名が出始めたとはいえ、八千代と市井にある一画家・楯彦との結婚は、人びとを大いに驚かせた。今回、この菅美記子（八千代の本名）が描いた可能性がある絹本淡彩画の紹介を通じ、その38年という短い生涯（1886～1924）との関連性を垣間見たいと思う。



本作品は三段表具の軸装で、風袋は白紙の押風袋、軸先は根来塗様の塗木で設えられている。桐箱（合箱）に納められ、箱書はない。しかし、所有者が貼付したらしい「菅夫人筆 田家の圖」と墨書された題簽があることから、ここでは本作を田家（田舎の家）の図として話題を進める（写真1）。

まず、本紙（縦37.0cm ×



写真1 「田家の図」と落款

横41.5cm）の中央には、遠方に山並みを望む藁葺の小家屋が描かれ、屋内に設けられた炉には鍋が吊され、周囲には籠や箆らしき道具が見える。窓辺には赤子に乳を含ませる、ふくよかな女性が座しており、その視線の先には犬が一匹うずくまり眠る。

屋外には外壁に立てかけられた竪杵と接して置かれた臼、反対側には鮭らしき大ぶりな魚が3尾、干物にするためか、物干竿に並べ吊されている。本紙の左上方には、「古へによりて美起女」の墨書と、朱文円印の氏名印「幹女」が捺されている。後述する新聞記事にあるように、楯彦の妻女となった遠藤美記子はその晩年、「幹子」も用いていたらしいことに注目すると、本作はその晩年作であろう。

本作以外で美記子が描いたことが明らかな作品には、政治・社会の諷刺漫画で知名の岡本一平が、友人の吾八と八千代の宴席で葉書に描いてもらった人物画がある（写真2）。一見客かつ俄大尽である両人が八千代と面会するまでに要する時間と所作について、時系列に従って一平が記した軽妙洒脱な「富田屋八千代を観るの記」の文面に笑いを誘われる。

文中で一平は後述する八千代の絵葉書の容貌から、「嬌音艶めかしくも亦玉を転はす如く」でなければと想像していたが、八千代の第一声「お、けに」のかすれた塩辛声に驚き、「競売やが風邪を引いて引籠って居る徒然に浪花



写真2 八千代の描いた李白図

節を唸ってる時の声」、「水銀を飲まされた浄瑠璃の大夫が商売替をして雪駄直しの呼声をやる時の声」と評した。また、八千代の小柄な体軀

などについて論を巡らせているが、初対面の印象を「的確に二重に縊れ居る彼女の二重脣は微紅を帯び恰も春石を抱く春の花の柔かく温かく睫を沿て香ひかゝり乱れかゝり」と表現している。このとき八千代本人が当年29歳と伝えたことから、李白図は大正4（1915）年に描かれたものである。富田屋の当主・矢田市兵衛に身を引くと伝えていた、八千代が30歳を迎える前年の出来事である。

このように、岡本一平が東京から遠路、伝を頼ってまで富田屋八千代を觀に来阪した理由の一つに、八千代を題材とした絵葉書の流布がある（写真3）。置屋「伊丹幸」から出ていた豆千代は後に八千代の姉芸妓となるが、八千代より五つ六つ年長であった。この豆千代を神戸の富豪・光村利藻が落籍した。光村は海運業で財をなした光村弥兵衛の長男で、道楽から大阪北浜で関西写真製版印刷合資会社を経営した。後年、美術印刷の光村と評されるようになるが、当時は歌舞伎役者や名妓の写真に彩色した絵葉書売り出していた。やがて日露戦争が始まると、光村は軍の慰問用にと妻の妹芸妓・八千代の絵葉書を10万枚寄付した。この絵葉書が八千代を全国的なスターに押し上げた。

ちなみに岡本一平の妻は歌人・小説家で仏教研究家の岡本かの子であり、歌集では『かろきのみ』、『愛の悩み』、小説では『鶴は病みき』、『生々流転』などを発表した。また、長男は前衛芸術家で、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会のシンボル「太陽の塔」を制作し、「芸術は爆発だ！」と叫んだ岡本太郎である。



写真3 八千代の絵葉書

さて、富田屋八千代こと遠藤ミキは明治19（1886）年、中河内郡西六郷村（現・東大阪市本庄付近）の農家・西田安次郎の四女・ミキとして生を受けた。ミキが誕生する前年、明治18（1885）年の淀川大洪水で家屋田畑を失った西田家は、堀江（現・大阪市西区）に移って両替

商を営むようになった。しかし、新たな家業も順調ではなく、明治27（1894）年の正月、8歳になったミキは置屋「加賀屋」の養女に出され、その姓が西田から遠藤になった。

ミキは加賀屋の斜め向かいにあり、三津寺町の「坂口楼」と並ぶ大茶屋「富田屋」の12代目・矢田市兵衛にかわいがられ、琴三弦をはじめ芸事を学んだ。やがて13歳になった明治32（1899）年、ミキは八千代としてお座敷に出ることになり、16歳には一本（一人前）の芸妓となった。20代に達した八千代は熟達した遊芸やきつぶがよい気性などから、東京赤坂の万竜、京都祇園の千賀勇とならぶ三大名妓と評されるようになった。大大阪と呼ばれた昭和前期は花柳界の全盛期、八千代は五花街にお茶屋500軒、芸妓4000人といわれたその頂点を極め、小八千代や千代葉など、妹芸妓だけで30名に達した。

劇作・小説家の長谷川時雨は、「ささや桃吉、春本万竜、照近江お鯉、富田屋八千代、川勝歌蝶、富菊、などは三都歌妓の代表として最も擢れている女たちであろう。（中略）当時大阪の人にいわせると、日本には、富士山と、鴈次郎（大阪俳優中村）と、八千代があるといった」と、後年『明治美人伝』に記した。米国から帰国中の野口英世をはじめ、八千代は著名人の宴席で舞う機会も増えた。八千代については喜劇俳優の曾我廼家五郎や若き日の松下幸之助なども、その印象を書き残している。

矢田市兵衛は芸妓の教養を高める目的で、舞妓や芸妓に茶華道や日舞、和歌・俳句などを学ばせることにも熱心であった。絵画の素養も重視したが、その師に招いたのが楯彦であった。馴れ初めは大正元（1912）年、明治天皇の崩御と大葬にともなう歌舞音曲の停止と約二ヶ月間に及ぶ休業時、市兵衛が芸妓に絵を修得させようと、親しくしていた楯彦に声をかけたのがきっかけである。しかし、時がたつにつれて熱心に絵を習い続けたのは、八千代ひとりになったという。このような経緯もあり、やがて楯彦は同年の知友、染織家・龍村平蔵などを介して、反対もあるなか八千代との結婚に漕ぎつけた。

八千代の結婚は新聞記事でも報じられ、大正6（1917）年2月1日、富田屋八千代は遠藤美記子として楯彦との婚礼をととのえた。明治11（1878）年生まれの楯彦とは、八つ違いの夫婦

であった。当時、上本町にあった楯彦の自宅二階での神前挙式には新郎新婦、媒酌人（龍村平蔵夫妻）、楯彦の母・妹、富田屋夫婦（矢田市兵衛・お柳）、立会人（岡本大更夫妻）の10名が出席しただけの、簡素で床しい祝言であった。後年、楯彦は「こいつがわしに惚れて、女房にしてと押しかけてきよった」と、自慢げに語っていたという。

この結婚を機に、それまで中堅の画家であった楯彦は広く世に知られるようになった。富田屋八千代が手鍋提げて押しかけた天下の果報者とは、どのような男であるのか、世間の好奇心が高まった。ときには美記子との結婚による妬みから誹謗中傷されることもあったが、楯彦は美記子をモデルにして作品の制作に邁進し、一段と腕を上げたと伝わる。

大正12（1923）年には、二代目市川猿之助の斡旋により東京・日本橋の三越本店で菅楯彦個展が開催され、東京でも楯彦の知名度は高まった。この個展の開催準備のため美記子は幾度か単身上京し、現役時代の縁で東京在住の有力者に個展の後援を依頼する挨拶廻りに奔走した。さらに、個展に続き楯彦の郷里である山陰旅行などが重なり、美記子の死期を早めた。

美記子は献身的に楯彦と亡父・菅大次郎（盛南）の妻・ツネに仕えた。武家の娘である義母は昔気質であり、芸妓として身についた美記子の立ち振る舞いや言葉遣いなどに対して、何かと口うるさかったという。楯彦の友人・谷崎潤一郎は、「みきさん、しゅうとめさんの前では、いつも手をついてもものを言っておった。なれない炊事・洗濯で、ひび・あかざれだらけになりながら、孝養を尽くされた。どんな金持ちや偉い方の奥さんにもなれた彼女の姿に、涙ぐむ者は多かった。そのせいか楯彦はみきさんが早世したあと、死ぬまで妻女はもたなかった」と語っている。

楯彦との婚姻生活の当初から、芸妓時代からの持病である鉛毒症と腎臓疾患により虚弱な美記子であった。楯彦は美記子をともない、和歌浦の和歌山紡績社長・土生信一氏の別荘をはじめ転地療養を重ねたが、次第に床に就く日が多くなっていった。薬石の効なく大正13（1924）年2月25日、東成郡天王寺村（現・阿倍野区松崎町）の自宅において、腎臓炎により38歳の波

乱の生涯を閉じた。美記子の遺言は、「死顔を人に見せて下さるな」であったという。



写真4 菅美記子の逝去を報じた新聞記事
（大阪朝日新聞・1929年2月26日朝刊）

その訃報は新聞記事として掲載され、元富田屋八千代の長逝は、世人にも広く伝わり惜しまれた（写真4）。明治12（1879）年、楯彦生誕の翌年に大阪・船場に生まれた俳人・青木月斗は、「白玉の八千代椿は落ちにけり」と詠み、その死を悼んだ。後年、富田屋八千代の生涯は「天野屋利兵衛」「実川延若」などで知られる劇作・演出家の郷田憇の手により大阪歌舞伎座で上演され、数多くの八千代伝説とともに、長く惜しまれ語り継がれた。

2月27日に執り行われた美記子の葬儀は、参列者が500人を超えた。楯彦は、「手鍋提げて並の嫁はんになりたかったのやろうに要らん学問させて済まなんだ」と涕泣したという。後年、北野恒富が妻を亡くしたとき、通夜の席で号泣する恒富に、「親を亡くして悲しめば孝子、子を失って悲しめば慈父慈母、友を失って悲しめば友情の深さをほめられるが、女房をなくして泣けば阿呆といわれる。どもならん」と冗談に託して慰めた。しかし、「私にも覚えがある。その当時、家に帰ってこれが自分の家だったのか、と思うたものだ」と述懐したという。

楯彦は美記子を喪った思い出の縁に、近い人びとに木製高台付盆を配った。この春慶塗の木製盆（直径25.5cm、高さ5.0cm）は、楯彦が「忍艸 菅楯彦」と墨書した青緑の麻袋に入れられ、鱧皮模様の貼紙の木製箱に収められている。その高台内面には長方形の焼印で「甲子初夏」（1924年）と捺されており、美記子の没

後約3か月して製作されたいらしい。また、木製盆の見込には黒漆で楓と月が描かれ、同じく黒漆で「さみしさに笙とりつゝも庭にいて 桜とともに一夜あかしぬ 美記女」と短歌が添えられている(写真5)。美記子は結婚前から国学者・篆刻家の近藤尺天を師として熱心に和歌を詠んでいたが、この短歌は美記子の文箱に納められていた遺詠である。



写真5 木製盆と美記子遺詠の短歌

美記子の遺骨は楯彦の手で四天王寺に埋葬された。昭和38(1963)年9月、美記子と死別してから約40年、清貧で高潔な人柄から「白木の神殿」とあだ名された楯彦は、85歳の天寿を全うした。臨終の床にあった楯彦は美記子の着物を遺骸に掛けてほしいと願ったと伝わる。

楯彦の逝去により、美記子は楯彦との新たな墓に納められるため改葬された。現在、美記子の初葬墓碑は、四天王寺境内にある無縁墓北面に組み置かれている。墓碑正面には近藤尺天による「菅美記子奥城」、左側面には「夫楯彦(以下不明)」と刻まれる。この無縁墓は、その頂上に安政元(1854)年11月4・5日、相次いで発生した安政東海・南海地震による犠牲者を供養し後世に伝え警告する「安政地震津波碑」があることでも知られる。

美記子と楯彦の墓所は、大阪市設南(阿倍野)墓地に建立された。大阪商法会議所(現・大阪

商工会議所)を設立した、五代友厚の墓所に近接した場所である。菅家の家督を継いだ甥の菅真人が建立した墓碑の正面には、「菅楯彦 菅美記之墓」、裏面右側には「天真院秀彩楯彦居士 昭和三十八年九月四日寂 俗名藤太郎 行年八十六才」、同じく左側には「天麗院秀室妙美大姉 大正十三年二月廿五日寂 俗名ミキ 行年三十八才」と刻まれ、美記子は永久の眠りに就いた(写真6)。



写真6 菅楯彦・菅美記の墓碑

このようにみると、本作は一世を風靡した名妓富田屋八千代が遠藤美記子として楯彦に嫁いだものの、心労を重ね病魔にも侵され、望んだ夢が叶わないことを悟った心象風景を描出したものではないかと夢想するのみである。

【主要引用・参考文献】

- 岡本一平1929、「富田屋八千代を観るの記」『一平全集』第9巻、先進社
 鳥取県立博物館2014、『没後五十年 菅楯彦展』、同博物館
 西浦香橋1986・87、「菅楯彦先生(一)～(三)」『大阪春秋』第48～50号、大阪春秋社
 長谷川時雨2009、「明治美人伝」『長谷川時雨作品集』藤原書店
 三田純市1980、「富田屋八千代」『道頓堀物語』、光風出版社
 三善貞司2006、「なにわ人物伝 楯彦・八千代」(1)～(3)、『大阪日日新聞』、ザ・プレス大阪

なお、短歌の翻刻には関西大学文学部小倉宗氏、関西大学博物館上原康生氏にご教示を賜った。銘記して篤く感謝申し上げます。

博物館長 文学部教授

『はくぶつかん』にみる昭和50年代前半の 東大阪市立郷土博物館（下）

長谷洋一

前回は、同館が昭和51年度に専門職員2名が退職、特別展示予算がゼロ査定になったことを記した。

12号（昭和52年4月）は、『はくぶつかん』創刊3周年記念号である。前年10月に館長となった榊原亮氏の「郷土と博物館」と題した現状紹介を掲載し、施設・職員数・予算の問題などで計画通り事業が進んでいないことが記された。また昭和50年度と51年度の入館者推移が示され、昭和50年度は11393名であったのに対し51年度は9819名で、その原因として秋の特別展が不開催であったことが大きいとし、「創意工夫も限界」と職員の心情が吐露されている。

続いて「小さなはくぶつかんの大きな使命」と題して館の使命や問題点が綴られる。同様の内容は既に1号や4号で示されたが、「郷土というものを重視した博物館として各方面の自治体関係者や一部の研究者の人々から注目を受けたものの地域の人々からの注目はあまりなく、財政難の時を迎えて、「むしろ市としては、分

相応な施設、あるいは資料館的なものに〈格下げ〉しては」などの声も聞かれると記している。そして大きな課題としては、“展示したのを見にこられるのを待つ”だけではなく「主として地域（東大阪市民だけではない）を対象に質的な充実を前提として博物館の方から積極的に働きかけ、あるいは学習の機会をつくることによって多くの人々に気軽にきていただけて学習ができる学習条件やその内容をもった博物館にしていくこと」が掲げられている。

14号（昭和52年11月）は「開館5周年記念号」と題され市制10周年・開館5周年記念の特別展示「郷土の文化遺産」に関する内容で占められた。「郷土の文化遺産」展は各指定文化財やそれに準ずる資料を展示したもので、考古資料のほか、絵画工芸、仏教美術、河内木綿、民俗資料、古文書など多岐にわたる実物資料のほか、古建築などの写真パネル、神感寺跡模型などが展示された。誌上では、河内木綿の「下機」の模型を作り実際に布を織った報告や神感寺跡模型の製作過程などが綴られている。「特別展雑感」では「今回の特別展のとりくみの中に、私は本館の歩むべき道をみたように思う」と締めくくっている。

しかし16号（昭和53年3月）では、「不況中の小さな博物館」と題され、「長期の不況下で市の財政は赤字再建団体と同一の状況にある」とする財政方針のもと「社会教育のように法律で義務づけられていない事業についてはかつてのように総花的な方針はやめて、社会教育部内でよく精選してもらいたい」という方向が示されたことを伝えている。

17号（昭和53年4月）では、前年度観覧者数が紹介され、前年度観覧者は14935名で過去最高の観覧者数を迎えたが、その要因として特別展のほかに、郷土史講座・考古学教室や史跡見学会の開催、“郷土に綿の花を咲かそう”という運動で希望者に綿の種を配布したことなどが掲げられている。しかし台所事情は悪化しており、



『はくぶつかん』12号

特別展示や普及教育活動に関する予算、図書・備品購入予算などは再びゼロ査定となった。

それでも誌上では、「河内の史跡をたずねて」「展示資料紹介」「河内かわらばん」などの連載記事に加え、「河内名所図会」（18号）や19・20合併号（昭和53年8月）では「暗越奈良街道」と街道沿いの道標調査、あるいは建築家中村順平の紹介などが誌面を飾っている。

手元の『はくぶつかん』は19・20合併号で終わっている。東大阪市立図書館で確認したところ33号（昭和57年5月）で終了している。

その後、東大阪市立郷土博物館は平成8年に（財）東大阪市文化財協会による管理・運営となり、平成18年には指定管理者制度が導入され、現在、鴻池新田会所などとともに東大阪市文化振興協会が管理・運営している。

長々と初期の『はくぶつかん』を振り返ってみた。『はくぶつかん』の愛読者であった筆者は後年、府下の博物館に勤務したが、財政方針を前提に「総花的な方針はやめて、社会教育部内でよく精選してもらいたい」など、財政事情に翻弄される博物館を実体験することも多かった。

いうまでもなく地域の博物館は地域住民あつての存在である。今日では「展示したものを

見にこられるのを待つ”」の博物館は存在しない。各種講座・講演会や体験学習会などの開催、学校への出前講座などさまざまな教育普及活動が行われている。

しかし自己反省も踏まえつつ振り返ると、本当に地域の博物館が地域住民の期待や学習機会に応えていたのだろうかとの疑問が生じる。

例えば「横矧板鉾留短甲」に「よこはぎいたびょうどめたんこう」とルビを打っただけのキャプションや解説に、来館者はどれほど理解しているのだろうか。あるいは古文書や民俗資料などに関心ある地域住民に博物館はどれほど応えることが出来ているのだろうか。

学芸員資格を得て市町村の文化財関係や博物館に奉職する人も多いが、業務につきながら専門分野のみに固執するのも地域住民にとっては失礼な話ではないかと思う。多くの文化財関係部局は文化財課や生涯学習課（社会教育課）、博物館も「歴史民俗資料館」「博物館」で、地域住民からすれば職員（学芸員）個人の専門分野はあまり意味をもたない。専門を疎かにするのは論外だが、時に研究報告展示と見紛うほど専門用語が羅列した展示も見受けられる。これでは十年一日ではないかと、かつての愛読者は思う。

文化財関係の仕事に奉職した以上、専門分野に精通しつつも少しでも地域に関する周辺分野や他の文化財に関心を広げていく努力が肝要ではないかと思う。『はくぶつかん』で紹介された文化財は展示資料のみならず大和川や奈良街道など多岐にわたり、その集成が「郷土の文化遺産」展となり過去最高とされた観覧者数に繋がっていた。地域住民の多彩な文化財への関心が博物館へ足を運んだことになる。

学芸員が少ない市町村の博物館は、どうしても専門分野偏重の展示になりがちである。厳しい言い方ではあるが、学芸員の専門分野＝地域全住民の関心ではない。学芸員が周辺分野や他の文化財にも関心を広げる努力をしない限り、来館者数は増加しないし博物館の存在も問われるだろう。専門分野の展示であればなおさら平易な解説を心がける必要があるのではないか。

35年前ながら『はくぶつかん』の赤裸々な記録は現在も色褪せていないと感じるのである。



『はくぶつかん』19・20合併号

博物館運営委員 文学部教授

「奈良県の近代化遺産について —奈良県の取り組みと事例紹介—」

井 上 主 税

1. はじめに

昨今、近代化遺産に関するニュースを耳にすることが増えている。『大辞林』には、近代化遺産とは、「重要文化財のうち、江戸末期から第二次大戦終了時まで、近代的な手法でつくられた建造物や工作物。産業・交通・土木遺産の三種がある。」と書かれている。

日本に所在する世界遺産をみると、2014年7月に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」、2015年7月に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」はともに構成資産の多くが近代化遺産からなる。

前者は、貿易を通じ世界経済の一体化が進んだ19世紀後半から20世紀にかけて、高品質な生糸の大量生産に貢献した技術交流と技術革新を示す集合体として評価されている。後者は、西洋から非西洋への産業化の移転が成功したことを証言する産業遺産群で、その所在地は九州を中心とする。封建制度下の日本が欧米からの技術移転を模索し導入した技術を、国内の需要や伝統に適合するよう改良し、日本が短期間で世界有数の産業国家になった過程を物語る。

また、2016年7月に登録された「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」の構成要素の一つである国立西洋美術館も、設計の決定が1955年とやや遅いが、近代建築の巨匠であるル・コルビュジエの建築的な特徴がよく表現されている点が評価された。

このように、数多くある文化遺産のなかで、最近では近代化遺産に対する関心が高まりつつあることが指摘できる。本稿では、奈良県の近代化遺産に関する調査・研究の現況を述べ、そのうちのいくつかの事例を紹介する。

2. 奈良県の近代化遺産

筆者が関西大学に着任するまで勤務していた奈良県立橿原考古学研究所の業務の一つである発掘調査では、先史時代から古代、中世にかけての遺跡を調査することが多く、幕末以降の近

代遺跡の調査はほとんど実施されていない。これは、奈良県が古墳時代の政権中枢にあり、また古代の宮都が営まれた場所であったことが大きな理由である。また奈良県に所在する世界遺産をみても、「古都奈良の文化財」、「法隆寺地域の仏教建造物」、「紀伊山地の霊場と参詣道」のように、奈良時代から平安時代の古代に該当する文化遺産から構成されている。

そのため、これまで奈良県の近代化遺産に関してはあまり知られてこなかったといえよう。しかし近年では、2011年度から2013年度までの3カ年で、近代化遺産総合調査（建造物）が実施され、近代化遺産を対象とした研究にも着手されている。ここでは、その成果報告書¹⁾をもとに、奈良県の近代化遺産の特徴を述べ、いくつかの事例を紹介したい。

まず成果報告書では、近代化遺産に関して、幕末から第二次世界大戦終了までを対象とし、基礎調査をおこない、産業1～3次、交通、官公舎、学校、生活関連、文化福祉、住宅、宗教、治山治水、その他に分類している。その上で、奈良県の近代化に関する総論および各論で、建築・産業・交通・土木に関する近代化遺産の特徴がまとめられている。なかでも、奈良県南部は京阪神への木材供給のため、鉄道や道路の敷設がおこなわれ、それにともない各方面で近代化が進展したとある。南部の山間部において、周知の遺跡が少ないのとは対照的に、近代化遺産が豊富な点は注目される。

事例紹介として、まず「奈良少年刑務所」のニュースが記憶に新しいところである。奈良少年刑務所（写真1）は、明治政府が1908年（明治41）に建設した煉瓦造の旧奈良監獄である。明治時代の「五大監獄」（千葉、金沢、奈良、長崎、鹿児島）のうち、完存するのはこの奈良だけである。明治政府は、竣工直後の1910年（明治43）の日英博覧会に模型を出展し、監獄施設の近代化を西欧社会にアピールしたという。2017年2月には日本の近代化の一側面を示す貴

重要な文化遺産として、重要文化財（建造物）に指定された。刑務所は同年3月末に閉庁されたが、今後の保存活用方法として、収容棟をホテルに転用し、刑務所の歴史を伝える「史料館」の開館が予定されている。

発掘調査で確認された近代化遺産の事例としては、明治時代の煉瓦積転車台があげられる。JR奈良駅連続立体化事業にともなう奈良駅構内の発掘調査（2005年度）²⁾において、蒸気機関車などを方向転換するための転車台を良好な状態で検出した（写真2）。直径約14m、残存高72cm、基底部幅1.38mを測る円形で、回転軸装置等の施設は取り外されていたが、煉瓦積の土台部分は良好に残存していた。1890年（明治23）の奈良駅開業以降に造られ、1921年（大正10）には使用されなくなった可能性が高いとされる。明治期の転車台として、数少ない重要な事例であったが、残念ながら記録保存となった。

鉄道と関連して、筆者は以前桜井市脇本遺跡の発掘調査を担当したことがあった。この遺跡が発見されたそもそもの契機は、明治期に運営が始まった桜井～初瀬間の軽便鉄道が1938年に廃止され、その跡地が県道（現在の国道165号線）として整備されたことにあった。現在では軽便鉄道の痕跡はほとんど残っていないが、掘削工事ともなって遺物が出土した状況等が、松本俊吉氏らによって記録されている³⁾。

このほか、奈良県立橿原考古学研究所と附属博物館に隣接して、「旧橿原文庫」の建物が残っている。1940年（昭和15）に国体建国精神を研究する文献資料を収集するため、「橿原道場」（現在の橿原公苑）の一施設として設置された。木造で入母屋棧瓦葺である。現在、この建物は研究所が管理しており、出土品の保管場所として活用されている。また、研究所への通勤に日々利用していた近畿日本鉄道橿原線の橿原神宮前駅中央口駅舎（1940年）は、関西大学の簡文館（大学博物館）をはじめ多くの建物の設計を手がけた村野藤吾氏の手によるものである。伝統的な大和棟をモチーフとした大きな屋根が特徴といえる。

3. おわりに

古墳時代から古代にかけての文化遺産が豊富な奈良県ではあるが、今回紹介したように身近

なところにも近代化遺産が多く所在する。「奈良少年刑務所」をはじめ、これらの文化遺産は今後の活用が期待される場所である。その一方で、建物の多くは老朽化が進み耐震性等の問題から、活用のためには保存の方策を講じる必要があるのも現状である。いずれにせよ、まずは奈良県民をはじめ、多くの人々に近代化遺産に関心を持ってもらうことが重要といえる。

註

- 1 奈良県教育委員会2014『奈良県の近代化遺産—奈良県近代化遺産総合調査報告書—』
- 2 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2006『大和を掘る24』
- 3 光石鳴己編2011『脇本遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第109冊

謝辞：法務省大臣官房秘書課広報室および奈良県立橿原考古学研究所から写真の提供を受けた。



写真1 奈良少年刑務所庁舎（法務省 HP より）



写真2 JR奈良駅構内遺跡の転車台（南より）

博物館運営委員 文学部准教授

春季企画展
河内国府遺跡発掘100周年
—近畿地方先史時代考古学のはじまり—

山口卓也

河内国府遺跡発掘100周年

河内国府遺跡は、古代河内潟の南縁、石川と大和川の合流地点の南西部段丘の北東縁部にある。1917（大正6）年、京都帝国大学の濱田耕作教授が、旧石器の在否確認を目的として調査し、想定外の縄文時代埋葬を発見して学界の注目を集めた。大阪毎日新聞社長の本山彦一氏は、球状耳飾や縄文土器、石器、銅鏃、大量の弥生土器、古墳時代前期の土器などを発掘し、これが関西大学博物館の本山コレクションとして重要文化財や登録有形文化財となっている。

今年が、発掘からちょうど100周年となることを記念し、京都大学総合博物館や道明寺天満宮宝物殿、大阪府教育委員会の所蔵する河内国府遺跡発掘資料を、関西大学博物館に集めて、2017年4月1日から5月21日まで春季企画展「河内国府遺跡発掘100周年—近畿地方先史時代考古学のはじまり—」を開催し、会期中3,107名の来場者があった。



写真1 春季企画展 河内国府遺跡発掘100周年

「旧石器」が河内国府遺跡発掘の契機

今回の展示会で特に意識して構成・展示したのは、大正時代における旧石器時代人類への関心の高さと、末永雅雄先生が1955（昭和30）年に「近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯

中」で採集した2点のサヌカイト製の「大形打製石器」の学史的な重要性である。

1916（大正5）年、京都帝国大学の濱田耕作教授に、郷土史家福原潜次郎氏が収集した大形石器を喜田貞吉講師が紹介した。濱田教授は、それにヨーロッパの旧石器との類似を認め、国府遺跡の発掘を計画し、1917（大正16）年6月、国府遺跡の発掘が開始された。

1956（昭和31）～1957（昭和32）年に、末永先生が所長であった榎原考古学研究所が「二上山文化総合調査」を実施し、酒詰仲男同志社大学教授らが先史班を組織して、二上山を中心とした無土器文化の探査、二上山産サヌカイトの分布調査、大阪府側の河南町飛鳥周辺のサヌカイト産出地調査などを行ない、さらに国府遺跡の小規模発掘を行なった。末永先生自身が明示したことないが、国府遺跡の大形石器がサヌカイト製であることから、その原産地である二上山北麓に注目したこと、連続して国府遺跡を調査したことに、濱田教授の問題意識を継承した表れがあると推測できる。

末永先生の調査に続いて、東京大学の山内清男教授、鎌木義昌氏らによる発掘調査が行なわれ、砂礫層直上の黄色粘土層から土器を伴わない風化したサヌカイト製石器がまとまって発掘された。その技術形態学的特長が岩宿遺跡で見られ、東日本で類例が追加されつつあった旧石器に連なっていることから、近畿地方にも旧石器時代の遺跡があることが証明された。連続した調査には、末永先生から山内教授らへの示唆の存在を類推できるであろう。

従来の学史では近畿地方における旧石器時代研究は、この山内鎌木両氏の国府遺跡でのサヌカイト製旧石器の発見を始めとする理解が一般的であるが、そもそもサヌカイト製大形石器が礫層中から出土するかどうかということが、近

畿地方における旧石器時代研究の初端であったことや、濱田教授から末永先生への問題意識の継承があったということ、今年は大形石器が注目されて101年目、国府遺跡の発掘が始まって100周年であることも銘記されるべきであろう。



写真2 展示風景

近畿地方旧石器時代考古学その後の展開

国府遺跡で発見されたサヌカイト製旧石器が近畿地方から瀬戸内地方にかけて発見されるようになり、近畿地方の先史時代研究は、後期旧石器時代にまで拡大されることとなった。

近畿地方における旧石器時代の研究は、1980年代以降、近畿地方中南部の層的研究環境の劣悪さを前提としながら、日本列島の後期旧石器文化の中に近畿地方の旧石器をどう位置づけるかという石器の形式学的編年・系統的比較研究が盛んに行なわれた。また、サヌカイト石材の開発と技術形態学的な構造化は、後期旧石器時代に起こった石器石材戦略的地域適応であったことが明らかとなった。

1980年代後半からは、全国的な件数と比べると数は少ないが、中国山地東部山間部に在り石材を主用する汎日本的な縦剥系の石器群の存在が認められ、これが始良T n火山灰の降灰が確認されたことと合わさって、瀬戸内系、中国山地系旧石器の接触動態と領域研究が行なわれ、旧石器時代の古民族学的動態研究の先行的試みも行なわれるようになった。近畿地方の旧石器はサヌカイト製が主体であるという固定的判断がぬぐい去られた過程は、近畿地方旧石器時代研究の展開において、大きな転換点であったといえよう。

一方、近畿地方北部の山間部低地にある湿原周辺や高原台地に見いだされつつある在地火山

産出の火山灰堆積環境と層序は、後期旧石器時代にとどまらず、中期や前期といったより古い旧石器文化調査の研究的環境の基盤となる可能性が確かめられている。さらに、古瀬戸内盆地や古大阪平野においても、より古い旧石器は、非サヌカイト製石器を候補として探索すべきことが明らかになった。国府遺跡の大形石器への濱田教授、末永先生の注目が、ようやく焦点を結びつつあるといえよう。

国府遺跡における旧石器の在否が注目されて100年、近畿地方旧石器研究において、遺跡などの遺存環境は質も量も劣ってはいるものの、後期旧石器時代のみならず中期やより古い石器文化の在否解明についても、新たな展開を生み出す基礎的な条件は整ってきたと思われる。



写真3 兵庫県篠山市板井寺ヶ谷遺跡の泥炭層と火山灰層

展示会を終えて

本山彦一の発掘隊が発掘した国府遺跡資料を蔵する当館は、今回の展示会を通して、近畿地方先史時代考古学のはじまり、旧石器時代研究の転機について再評価することとなった。これからも収蔵する国府遺跡資料の調査研究を進め、河内国府遺跡発掘100年の学史と、発掘した本山をめぐる事象、その時代の研究者間の交流についても調査を続け、その成果を発信していきたいと考える。

展示会開催に際し、ご助力を賜りました道明寺天満宮、京都大学総合博物館、大阪府教育委員会埋蔵文化財調査事務所、藤井寺市教育委員会、ご協力いただいた方がたに、厚く御礼申し上げます。

関西大学博物館学芸員

本山彦一蒐集考古資料の剥片尖頭器

渡邊 貴 亮

はじめに

関西大学博物館には、本山彦一蒐集考古資料（以下本山コレクション）が所蔵されている。この約19,000点の一括資料群は、2011年に登録有形文化財として登録されている。

本稿では、本山コレクション内より発見された旧石器時代遺物について紹介するとともに、その蒐集地について若干の考察をおこなう。

発見に至る契機と資料化にいたる経緯

剥片尖頭器は、『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』（関西大学博物館2010）に「MY-U4087」として記載されている資料である。本資料は本山コレクションの目録作製のための再整理中に見出されたものである。目録では本資料が剥片尖頭器と呼ばれる石器であり、九州島における後期旧石器時代の遺物であることを考慮し、確認資料名を「旧石器」と表記している。山口卓也氏によって本資料が旧石器に属する資料であることは確認されたが、その後は特に展示や研究に供されることはなかった。

2017年、筆者は本資料の存在を聞きおよび、資料化と本誌への執筆の機会を得た。そこで、本資料の資料化によって、今後の剥片尖頭器の調査研究の一助とするため、また、大阪府内に

所在する貴重な九州島の旧石器資料として広く活用されることを期待し、本稿の執筆に至った。

本山彦一蒐集考古資料の剥片尖頭器

本資料は、剥片尖頭器と呼ばれる後期旧石器時代の資料である（図1・写真1）。残存長5.3cm、幅2.98cm、厚さ0.85cm、重量は11gである。先端部をわずかに欠くが、ほぼ完形である。表面は激しく風化が進んでいるが、新欠部の観察より石材はホルンフェルスであると考えられる。

やや幅の広い縦長剥片を素材としており、主要剥離面側からのブランディングにより、剥片尖頭器に特徴的なノッチ様の基部を作り出している。石核上の剥離面を打面として用いており、打点は除去されていないが、基部の作り出し時にバルバースカーによる凹凸を除去しようとしているようにも見て取れる。表面には3枚の先行する剥離痕が残されており、概ね剥離軸も揃っている。縦長の素材剥片を連続して剥離した石核から、本資料の素材剥片は剥離されている。

尖頭部の欠損は衝撃剥離痕の様相を呈しており、風化の度合いが器面と同様であることから、使用もしくは廃棄に伴う欠損であろう。その横にみられる右側縁先端部付近のやや微細な

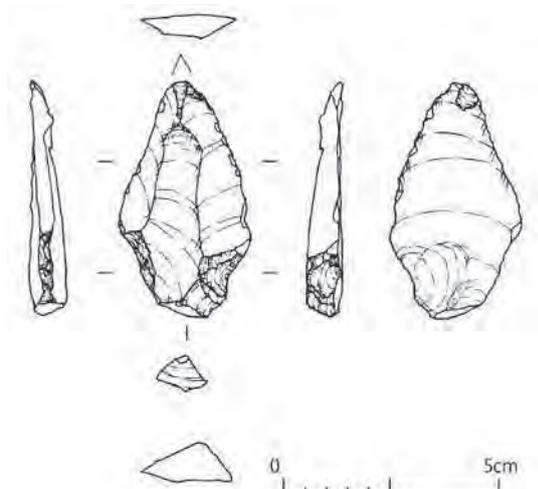


図1 MY-U4087実測図



写真1 MY-U4087

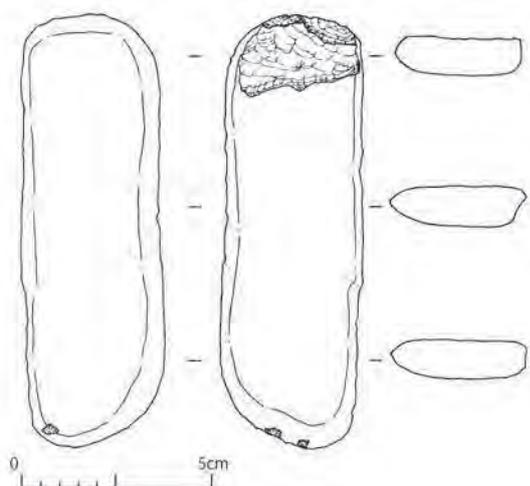


図2 MY-U4097実測図



写真2 MY-U4097

剝離痕は、衝撃剝離痕以前に施されており、本資料は基部および先端部付近に二次加工が施される型式の剝片尖頭器であろう。

主要剝離面の剝離角は99.7°を、基部右側のプランテイング角度は約70°、基部左側のプランテイング角度は約55°をなす。

石器の表面には朱書きで「日向」の文字が、裏面には墨書で「矢の根」の文字が注記されている¹⁾。

さて、ここでもう1点本山コレクションを紹介しておく。「MY-U4097」として登録されている資料である(図2・写真2)。本資料は、扁平な川原石の両端に剝離痕を有するが、剝離痕からは明確な人為性を見出すことは困難である。ハンマーストーンの可能性を考慮したが、剝離痕の剝離軸や打点の状況などから敲打に伴う剝離とは認定しがたい。両端の剝離痕は自然為の割れであろう。

長さ11.5cm、幅3.85cm、厚さ1.28cm、重量98gであり、石材は石英片岩²⁾であろうか。本資料も、MY-U4087と同様に表面に朱書きで「日向」の文字が、裏面には墨書で「石斧」の文字が注記されている。

剝片尖頭器の蒐集地について

先に紹介した2点の資料は、表面に朱で地名を、裏面に墨で器種名を記す注記の方法や字体から、同一人物による同時期もしくは極めて近

接する時期に蒐集・登録された資料である可能性が非常に高い。これらの資料は、1点が九州島で多く出土する剝片尖頭器であり、かつ「日向」の文字からみても、宮崎県内で収集された資料であることはほぼ確実であろう。

どのような経緯で本山氏のもとへと渡ったのかは不明であるが、1912年におこなわれた西都原古墳群の発掘調査の折には本山氏自身も宮崎県へ赴いており、あるいは本山氏自身が現地で収集したものかもしれない³⁾。

ここで、本山コレクションの一覧を参考にしてみると、確実に「日向」のものと判明している資料は11項目確認できる(表1)。表1のうち石斧が登録されている資料を確認したところ、MY-S1072には打製石斧が1点しか収蔵されていなかった。よって、MY-U4097はMY-S1072と同じ場所で蒐集された可能性が高い。

また、剝片尖頭器の裏面には「矢の根」の文字が確認できるが、矢の根とは鏃のことである。剝片尖頭器の用語は1970年代に入ってから、橘昌信氏や清水宗昭氏らによって提唱されており(橘1970、清水1973など)、本資料の登録時は鏃の一種との認識であったとしても、なんら不思議ではない。MY-S1072の項目には石鏃も登録されており、MY-U4087およびMY-U4097はMY-S1072と同じ場所で蒐集された可能性が高いと言えよう。

図3は宮崎県内の主な剝片尖頭器出土遺跡

と、MY-S1072の蒐集地を示した図である。表1にあるように、MY-S1072の蒐集地は現宮崎県延岡市天下町⁴⁾である。天下町付近に所在する主な剥片尖頭器出土遺跡は 2. 赤木遺跡 3. 野門遺跡 4. 吉野遺跡などがある。

図4はこれらの遺跡出土の剥片尖頭器である。この中で注目すべきは2・3・9の資料である。2・3は赤木遺跡第8地点出土の剥片尖頭器である。大きさや形態の他に、素材剥片の打面を除去しない点や基部の作り出し方、ブラントング角など多くの点でMY-U4087と類似する。特に2はその傾向が顕著である。しかし、これらの剥片尖頭器のほとんどが白色流紋岩を石材として用いており⁵⁾、風化が進行したMY-U4087と色調、質感共に似通っているが、石材が異なることにも注意を払う必要がある。

9は吉野遺跡出土の剥片尖頭器である。大きさや形態はもとより、表面に残されている石核上で剥離された先行する剥離痕の構成が極めて近似している。これは、MY-U4087と同様の手順で素材剥片が剥離されている可能性が高い。

ここまで、大まかにではあるが、本山コレクション中の旧日向国蒐集資料とその周辺から出土している剥片尖頭器について概観した。剥片尖頭器についてはごく一部しか取り上げておらず、まだまだ検討の余地は残すところとなっている。特に、本資料を延岡市周辺の蒐集資料と推測した場合の石材利用の不一致が今後の検討課題となることは明白である。

しかし、本山コレクションというある程度の一括性を担保した資料群の中において、遊離した資料であることを勘案するならば、現状では天下町周辺蒐集資料と推測しても良いのではないだろうか。本稿における比較検討の結果をより積極的に評価するのなら、延岡市所在の赤木遺跡もしくは吉野遺跡の資料である可能性を示唆するものである。また、MY-U4097のような石材は、宮崎県南部の遺跡ではほとんど見られず、宮崎県北部の遺跡で見られるとのことである⁶⁾。この様相もまた、この2点の資料が宮崎県内では北部に位置する延岡市所在の遺跡から蒐集された可能性を示唆するものであろう。

おわりに

本稿では、本山コレクションに含まれる数少ない旧石器資料である剥片尖頭器と、それに伴う石製資料について紹介し、蒐集地について若干の考察をおこなった。MY-U4097資料については、遺物とは認定できなかったが、本山氏が明確な人口品のみならず僅かな加工のような痕跡を有する資料までも、積極的に蒐集対象としていた姿勢が看取される。

剥片尖頭器には「日向」「矢の根」の注記が読み取れ、本資料が旧日向国（現宮崎県）内で

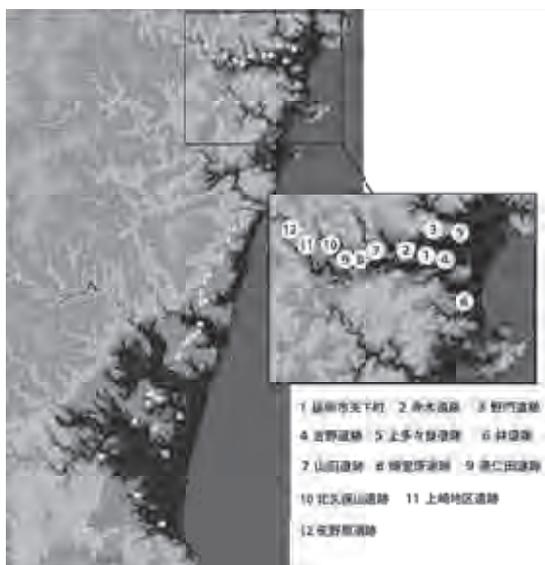


図3 遺跡分布図

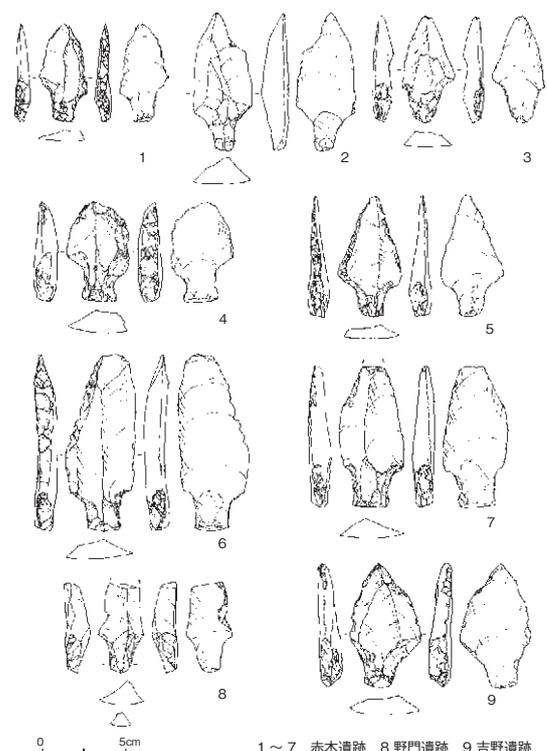


図4 周辺遺跡出土剥片尖頭器

表1 本山コレクション日向蒐集資料一覧

登録番号	資料名	本山要録地名	現行政区
MY-S1071	磨製石鏃	日向國東臼杵郡南方村字天下伊舞野	宮崎県延岡市天下町
MY-S1072	打製石斧2点・石鏃5点	日向國東臼杵郡南方村字天下伊舞野	
MY-S1073	磨製石斧・打製石斧	日向國東臼杵郡南方村字天下伊舞野	
MY-S1074	打製石斧	日向國東臼杵郡平岩村	宮崎県日向市大字平岩
MY-S1075	打製石斧・石錘	日向國兒湯郡美々津町美々津及石並	宮崎県日向市美々津町
MY-S1076	打欠石錘	日向國兒湯郡持田村	宮崎県兒湯郡高鍋町持田
MY-S1077	半磨製石斧	日向國兒湯郡都農郡村荒武	宮崎県兒湯郡都農町
MY-S1078	半磨製石斧	日向國兒湯郡内の野村	宮崎県兒湯郡都農町川北内野々
MY-S1079	半磨製石斧	日向國兒湯郡上江村字上江	宮崎県兒湯郡高鍋町上江
MY-S1081	打製石器	日向國西臼杵郡佐土原町	宮崎県宮崎市佐土原町
MY-S1082	打製石器	日向國西臼杵郡高千穂町	宮崎県西臼杵郡高千穂町

蒐集されたこと、当時は鏃の一種であると考えていたことなどが確認できた。

また、同様の注記をもつ石製資料を検討し、これらの資料が宮崎県延岡市天下町蒐集資料に帰属する可能性を指摘した。天下町周辺の遺跡出土剥片尖頭器を比較検討した結果、宮崎県延岡市所在の赤木遺跡もしくは吉野遺跡周辺からの蒐集の可能性を述べた。

本山コレクションの資料中には、本資料のように蒐集地が明確に判明していないものが多数含まれている。しかし、その豊富な資料内容のみならず、現在関西大学博物館に所蔵されるまでの経緯までもが、日本考古学史上きわめて重要な資料群であることを再度確認するに至った。

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり関西大学博物館の山口卓也氏、山下大輔氏には大変貴重なご教示を賜りました。末筆ながら明記して感謝申し上げます。

- 1) 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』には「山の根?」との記載があるが、山下大輔氏(関西大学博物館学芸員)のご教示により「矢の根」であることが判明した。
- 2) 筆者の肉眼観察に拠るため、今後専門的見識者の鑑定が必要である。
- 3) 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
- 4) 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』では現在の「宮崎県西都市大字南方」と記載されているが、「東臼杵郡南方村」は現在の「延岡市」となっているため、本稿では「延岡市天下町」とした。
- 5) 報文参照。
- 6) 山下氏のご教示による。

図3はカシミール3Dを用いて作成。

図4は宮崎県埋蔵文化財センター2006・2007・2008・2009より筆者加筆修正して作成。

主要参考・引用文献

- ・関西大学博物館2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
- ・清水宗昭1973「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻第11号 財団法人古代学協会
- ・末永雅雄編1935『本山考古室要録』
- ・橘昌信1970「6. 周辺遺跡の調査(その2) - 宝満川流域の先土器時代 -」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 - 第1集 -』福岡県教育委員会
- ・宮崎県埋蔵文化財センター2006『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集 野間遺跡 一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- ・宮崎県埋蔵文化財センター2007『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集 吉野第2遺跡 一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- ・宮崎県埋蔵文化財センター2008『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第165集 赤木遺跡第8地点(第三次調査) 一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』
- ・宮崎県埋蔵文化財センター2009『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第182集 赤木遺跡第8地点(第一次調査) 一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』

※図を引用した発掘調査報告書以外は紙幅の関係上割愛いたします。

博物館学芸アシスタント
文学研究科博士課程後期課程在学

◆ 博物館だより

◇2016（平成28）年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	27	24	28	2	4	0	25	11	18	18	16	14	187
入館者数	2,156	2,569	2,075	126	3,236	0	1,130	654	566	178	386	360	13,436

◇2017（平成29）年度春季企画展として「河内国府遺跡発掘100周年—近畿地方先史時代考古学のはじまり—」を4月1日から5月21日まで開催し、3,107名の方にご来場いただきました。展示資料は、当館所蔵の登録有形文化財「本山コレクション」に含まれる大阪府藤井寺市所在の国府遺跡出土資料を中心に、京都大学総合博物館と道明寺天満宮、大阪府教育委員会からも関連資料を借用しました。関連催事として、5月13日に当館学芸員山口卓也による講演会が開催され、83名の参加を得ました。

◇本年度テーマ展として、4月1日から5月21日まで「関西大学と村野藤吾」を春季企画展と同時開催しました。本展では、2016年度に京都工芸繊維大学の学生が作成した1969（昭和44）年頃の「関西大学千里山キャンパス」建築模型や写真パネルを展示しました。4月15日には京都工芸繊維大学の笠原一人先生を講師にお迎えし、講演会を開催しました。

◇6月6日から6月30日まで夏季企画展「炭鉱の記憶と関西—三池炭鉱閉山20年展—」を開催しました。この展示は、関西大学経済・政治研究所「大阪の社会労働運動と政治経済研究班」（2013-2016年度）の研究発表の場として位置づけられます。エル・おおさかギャラリーでの展示の後に、関西大学博物館でも巡回展として開催されました。期間中は1,251名の方にご来場いただき、6月11日には児島惟謙館においてシンポジウム「炭鉱の記憶と関西をつなぐもの—多様な記憶を時空に刻む—」も開催されました。

◇本年度夏季テーマ展として、7月17日から9月30日まで「ノーマンD. クック教授、林武文教授のふしぎなサイエンスアート」展を開催しました。本テーマ展は、本学総合情報学部のノーマンD. クック教授と林武文教授の、長年にわたる錯視に関する研究成果をサイエンスアートという形で紹介・展示し、期間中には4,304名の方にご覧いただきました。

◇博物館キッズミュージアムを7月26日と8月2日・3日に実施しました。7月26日には万葉書作家の鈴木葩光先生指導のもと、50名の子供たちが書道の楽しさを学びました。8月2日・3日には今年も紀伊國屋書店、丹波市、大阪府立弥生文化博物館など学外からも協力を得て、子供たちに様々なプログラムを体験してもらいました。小学生を中心に3日間で参加者は2,330名でした。



◇本年度上半期に、博物館夏季企画展「炭鉱の記憶と関西」にご助力いただいた鶴飼雅則氏からSPレコード4枚の寄贈がありました。このSPレコードは、昭和30年頃の炭鉱の労働歌として広く歌い継がれた代表的なものです。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、本館所蔵の青花白磁花鳥文大皿です。明代後期の景德鎮で焼かれたもので、その意匠から芙蓉手と呼ばれる資料です。八つに区画割りされた周縁部それぞれに稜花形文が描かれ、その中にチューリップを便化した花文を配しています。皿の中央には蓮池水禽文がみられます。このような意匠は日本の有田でも盛んに模倣され、ヨーロッパに大量に輸出されました。

今年度、関西大学博物館において高度専門職業人としての学芸員を養成することを目的として、学芸アシスタント制度がスタートしました。2017年度は、文学研究科博士課程後期課程2年の渡邊貴亮さんが学芸アシスタントとして博物館の学芸業務に従事しています。

